

会議の運動』御茶の水書房，2000年3月刊，  
vii + 378頁，定価6500円 + 税)

(くりき・やすのぶ 専修大学経済学部教授)

中野隆生著

## 『プラーグ街の住民たち

フランス近代の住宅・民衆・国家』

評者：佐伯 哲朗

「歴史のフロンティア」という全37冊からなる西洋史のシリーズが，山川出版社から刊行されつつあるが，本書はそのうちの1冊である。本書の「あとがき」によれば，著者の研究は「革命，反乱，ストライキといった運動とのかかわりで労働者や民衆をとらえる社会運動史的立場から出発し……一貫して民衆に向けられてきた」。本書は「より広がりのある枠組みで民衆を把握する可能性を，住宅を直接の素材としながら模索し」，「シリーズ 歴史のフロンティア」の方針にそって書き下ろしたという趣が濃いものである。

著者によれば，本書の目的は，「低家賃住宅誕生の起源にあった居住空間編成の試みとそこに住んだ人びとの日常生活や人的結び付き，そして，その歴史の変遷を，いくつかの代表的事例にそくしつつ検討する」ことにある。このような対象についての著者の観点を一言で表現するならば，「居住の場と生活様式とは不断の緊張関係にあり，その関係の変化は住居と生活者の双方に変わることを強いる」という点に尽きるであろう。

本書の構成は，次のようになっている。

プロローグ わたしたちの失敗

第1章 労働者のための住宅を

第2章 変貌する居住空間

第3章 ミュルーズからパリへ

第4章 集合住宅の建設原理

第5章 プラーグ街の住民たち

第6章 「福祉国家」への流れのなかで

第7章 「近代」への反省

付録 索引 / 史料と文献 / 図表出典一覧

本書の内容を評者なりにまとめると次のようになる。

オー・ラン県の繊維工業都市ミュルーズに建設された労働者都市は，その規模においても影響においても，労働者住宅の代表的事例とみなされてきた。労働者都市の建設にこめられた狙いは，労働者の確保と定着，衛生的に優れた居住空間の実現，民衆ないし労働者の家族単位における団結と自立の強化，そして民衆に固有の関係性や生活習慣の矯正といった点におかれていた。そのすべてが合して，近代産業の適的な規律ある労働者，生活者が創出されることが期待された。そのために建設財源の確保がはかられ，都市と住宅の空間編成や住宅の販売方法に配慮がなされたが，それでもさまざまな矛盾を抱え込まざるをえなかった。

1860年代以降，労働者都市のほとんどの住宅に入居者があり，その大多数は労働者であったことから，労働者の確保，定着にかんしては一定の成果があがっていたとみなすことができる。共同洗濯場では時間制にしたがって洗濯する女性が一部ではあっても存在しており，「教育」的な狙いがまったくの空論にとどまったわけではなかった。

世紀転換期フランスでは，大衆社会の到来とともに，大都市とりわけパリにおいて大規模な集合住宅の必要性が高まった。ロチルド，ルボ

ディの両社会事業団は、ともに安価な賃貸住宅を建てることで、自らの働きと稼ぎで生きる人びとの物質的生活条件を改善しようと願った。

ブラーグ街低廉住宅は、1909年に竣工したロチルド社会事業団による大規模集合住宅である。それについては、次のような特徴を指摘することができる。第1に、住民の社会的属性を均質なものと定めずに、階層、世帯、家族などの点で比較的多様な人たちの共生をめざし、部屋数が違う数種の住戸が準備されたが、規律ある生活を知らない下層民衆の入居はあまり期待されていなかった。第2に、とりわけ照準が合わされたのは、人数にしてせいぜい5～6人までの、ある程度規律化された家族であり、そうした家族の独立性を高める配慮や措置が凝らされていた。第3に、もっとも、家族の独立性を促進する試みは、随所に組み込まれた衛生的で秩序立った空間を維持するための工夫に窺えるような、民衆の生活習慣にたいする激しい警戒感との微妙な均衡のうえに立って実施され、それゆえに居住空間を貫く原理は妥協的な傾向を帯びざるをえず、しかも、その妥協性は伝統的家具産業の街と調和させるために、ことさらに強められた。第4に、入居してきた家族を、共同施設などを活用しながら規律化し、摩擦なく社会へ包摂しようとしたことである。

ブラーグ街低廉住宅は、文字通りの下層民衆を必ずしも念頭においてはなかった。むしろ、民衆のなかでも一定以上の収入を確保できた熟練度の高い職人、仕事の面で定期的な給与を期待できた労働者、職員、公共サービス部門従業員（官公庁、公営事業、鉄道、電気、ガスの職員）にこそ標的は定められた。

ブラーグ街低廉住宅には、いささか上層に傾く傾向があったとはいえ多様な階層が居住していた。その主体は稼ぎのよい熟練した職人や労働者、あるいは収入や職を安定して確保しえた

私企業ないし公共サービス部門の職員からなっていた。家具産業にかかわる職人、労働者、あるいは鉄道職員、郵便局職員が住民の中核を形成していた点では、ほぼロチルド社会事業団の想定した通りの現実が生まれていた。非熟練の下層労働者はきわめて少なく、むしろ比較的上層に属する「技術者・中堅管理職」に増加の傾向があった。年齢構成の上昇とともに、居住者全体や世帯主のなかで退職者や無職の人が占める比率が高まったが、その場合、公共サービス部門などの職員たちが老齢退職したのちもしばしば住みつづけたのにたいし、職人や労働者は高齢になっても働くことでブラーグ街の住民でありつづけた。

当初はやや目立った過密状態の世帯も徐々に解消し、余裕ある衛生的空間が広がったことでも、自立した家族のまとまりを介して、建設者の目標は達成されつつあった。家族のなかには世帯主のほかに稼ぎ手を抱える場合が多く、また拡大家族など複雑な構造の世帯も少数ながら存続していた。さらに浴場をはじめ共同施設に託された生活習慣の規律化も徐々に成果をあげつつあった。

このように、低廉住宅にこめられた狙いは少なからず貫徹し住民の定着を促したが、それにとまって住民の高齢化や少人数世帯の増加が生じ、その傾向は家具産業の変化など地域の事情も手伝って、ことさらに強まった。建設者にとって、これは予測外の事態であり、共同施設の改廃など、やむをえざる変更にも帰着することもしばしばであった。シェイソンによって待望された、多様な人からなる調和的な小世界の実現は、ときとともに揺れ動き、おそらく最後まで達成されはしなかった。

ブラーグ街低廉住宅において、退職後も1～2人などの少人数世帯で残ったのは、老齢退職年金の保障がしっかりしていた職員、とりわけ

公共サービス部門の職員であった。一方、少なからぬ職人や労働者が高齢となっても働きつづけたのは、年金制度の未整備のゆえに、暮らしていくには稼ぎつづけるしかなかったからではあるまいか。

本書の内容についてのコメントは、評者の学識では困難であるが、素人による不満を1つ書かせていただくと、20世紀初頭を代表する集合住宅を生んだロチルド、ルポディ両社会事業団の住宅群のなかで、著者がなぜプラーグ街低廉住宅を選択したのかが、説明されていないように思われる。あるいは「低廉住宅のルール」との評価が生まれるのは、それが代表的なものであるから、著者には当然のことであったのかもしれないが、読者が理解するには十分ではないように思われる。もとより、そのような点は、本書の基本的な評価を変えるものではないことは言うまでもないが。

さて、本書を一言で表現するとすれば、大著ではないが、文字通りの労作である、と言える。著者は、住宅と関連させて住民構成や日常生活を把握するために、選挙人名簿、人口調査（国勢調査）原簿などを活用しながら、家族などの

社会的諸関係や日常の生活習慣に迫るという方法を用いて本書を完成させている。著者の堅実な仕事ぶりは、見事に結実している、ように評者には思える。また、付録にあるかなりの量の「史料と文献」をみても、著者の投下労働量の多さを想像することができる。それとともに、人口調査原簿などの人名を丹念に付け合わせるという作業を通して、居住者の日常生活を描きだす著者のねばり強さも窺い知ることができる。それゆえ評者としては、著者の今後の研究の方向についても興味をそそられる。

もとより本誌の読者諸賢には、本書の対象とする領域の門外漢たる評者には、そもそも著者の労作に敬服するだけの資格や能力があるか、という根本的な疑問も生じるであろうが、門外漢は門外漢なりに率直な感想を書かせていただいた。読みやすい本である。労働史や社会史に関心を持つ方には是非一読をお薦めしたい。

（中野隆生著『プラーグ街の住民たち フランス近代の住宅・民衆・国家』山川出版社、1999年7月刊、305+24頁、定価2667円+税）

（さへき・てつろう 法政大学大原社会問題研究所  
兼任研究員）